

1. 国際シンポジウム「イメージとしての戦後」 1. [2009年1月9日—11日]



《単たる時代区分にとどまらない、長引く日本の「戦後」。この観念としての「戦後」が、戦前戦中との連続性と植民地主義・帝国主義の負の遺産を忘却させる装置として働いてきたことは、すでに繰り返し指摘されてきたところである。「戦後」はどのようなイメージとして産出され流通してきたのか、歴史がいやおうなくイメージとして消費される現代社会にあつて私たちはそのイメージにどのように向き合うべきなのか——。》

このような問題意識のもと、「イメージとしての戦後」と題して、国内外の研究者およびアーティストが参加し、以下のような国際シンポジウムおよび関連企画を開催した。

企画の内容は、2009年5月に藤木秀朗編により報告書(144ページ)にまとめられた。また、2つのシンポジウムの報告の一部は編集され、論文集として出版社より近々刊行される予定である。

【1月9日(金)】 ◎新世代パネル

第Ⅰ部：〈戦後〉という現実と出来事に対峙する表現——文学・映画・アニメから問う

- ① 〈戦後〉の裂け目としての〈肉体〉／〈性〉
天野 知幸(滋賀大学)
- ② 戦後の大衆表象に向けられる越境的視線の交錯——『東京物語』の想起と創造をめぐる
洞ヶ瀬 真人(名古屋大学大学院博士課程)
- ③ 『圧殺の森』再考——60年代末ドキュメンタリーにおける身体と言葉の相克とニュー・リアリズム
畑 あゆみ(アルスター大学大学院博士課程)
- ④ 押井守作品における戦後空間——全共闘・都市・暴力、その批評性の在処
水川 敬章(名古屋大学大学院博士課程)

ディスカッサント：西田谷 洋(愛知教育大学)

司会：竹内 瑞穂(名古屋大学大学院博士課程)

第Ⅱ部：「戦後」と「私」の問題——データベースの中での現象と表現

- ① 生の現実 現代美術におけるフィジカルな表れ
粟田 大輔(東京藝術大学非常勤講師)
- ② メディウムからこぼれ落ちるもの
田幡 浩一(アーティスト) & 松田 愛(名古屋大学大学院博士課程)

-
- ③ 複数の映像、複数の現実
伏木 啓 (アーティスト、名古屋学芸大学)

- ④ カーソルが指し示す先
水野 勝仁 (名古屋大学大学院博士課程)

ディスカッサント：秋庭史典 (名古屋大学)
司会：松田 愛

- ◎ 展覧会 & パフォーマンス企画：
イメージの悲しみ
企画：茂登山 清文 (名古屋大学)

- ◆ パフォーマンス
アーティスト：金ちゃんユニット

- ◆ 展覧会 (2009年1月5日～15日)
津田 佳紀、椿原 章代、西村 正幸によるグループ展

【1月10日(土)】 ◎ 映画上映企画：
『にっぽん戦後史——マダムおんぼろの生活』今村昌平、1970年

- ◎ シンポジウム第 I 部：
歴史の表象

- ① 日米映画戦とその後を絶たない「続編」
阿部マーク・ノーネス (ミシガン大学 / ハーバード大学)

- ② 戦後のネオテニー
トーマス・ラマール (マギル大学)

- ③ 歴史性に対する懐疑と『空間化』される時間——1960年代以降のオルタナ系マンガを中心に
ジャクリーヌ・ベルント (横浜国立大学)

- ④ 「戦後」の視覚的 (再) 配置
藤木 秀朗 (名古屋大学)

討論
ディスカッサント：中村 秀之 (立教大学)
司会：馬場 伸彦 (甲南女子大学)



【1月11日(日)】 ◎シンポジウム第Ⅱ部：イメージ消費と歴史認識

- ① 「ワンダーランド・ヤスクニ」——同床異夢？
シュテフィ・リヒター（ライプツィヒ大学）
- ② ジャズ喫茶からみた戦後文化の変遷
マイク・モラスキー（ミネソタ大学）
- ③ 「大東亜」という倒錯——大城立裕『朝、上海に立ちつくす』におけるジェンダー・トラブル
新城 郁夫（琉球大学）
- ④ 消費する／される歴史——高橋和巳の小説における戦中戦後の〈重ね書き〉
坪井 秀人（名古屋大学）

討論

ディスカッサント：成田 龍一（日本女子大学）
司会：林 正子（岐阜大学）

2. 第1回 日本近現代文化研究センター講演会
[2009年3月14日]



国際日本文化研究センター教授の鈴木貞美氏を講師として講演会を開催した。多様なテキストを緻密に分析しながら、日本において「文学」と「芸術」の概念がいかんにして制度的に形成されたかを検証するものであり、日本語学史および近代短歌研究の立場からのコメントを受けて、活発に意見交換された。

◎講演会：
日本近現代文化史再編のために
——「文学」「芸術」概念を中心に——

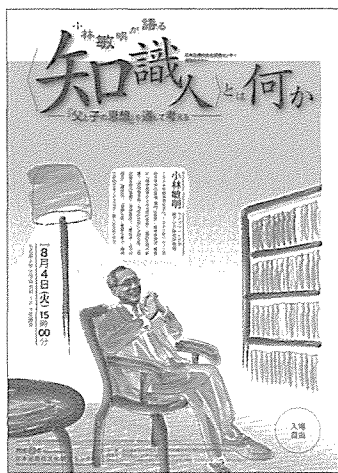
講師：
鈴木 貞美（国際日本文化研究センター）

ディスカッサント：
齋藤 文俊（名古屋大学）
松澤 俊二（名古屋大学大学院博士課程）

司会：
坪井 秀人（名古屋大学）



3. 第1回 日本近現代文化研究センター特別セミナー [2009年8月4日]



ライプツィヒ大学教授小林敏明氏を講師として、特別セミナーを開催した。小林氏の近著『父と子の思想—日本の近代を読み解く』（ちくま新書）の内容に触れながら、現代における知識人の可能性について論じられ、活発な議論が行われた。本セミナーは2010年1月に開催される国際シンポジウム「反乱する若者たち — 1960年代の運動・文化」の関連企画としても位置づけられるものである。

◎特別セミナー：

小林敏明が語る「〈知識人〉とは何か
—『父と子の思想』を通して考える—」

講師：

小林 敏明（ライプツィヒ大学東アジア研究所）

司会：

坪井 秀人（名古屋大学）

